

「東日本大震災と災害対処の文化」

考えてみよう 地域社会の来歴と未来を！！ 情報を「伝える」こととは何か

①太平洋側と日本海側の「間災期（かんさいき）」の違い

→太平洋側では短く、日本海側では□い。太平洋側地域では「災害情報」を体験者が語り継ぐことが可能（石碑、慰霊碑、災害遺構、標語、伝承的手法以外に「□り部」による体験談）

②宮城県仙台市若林区霞目（かすみのめ）2丁目の国道4号線東側、陸上自衛隊霞目飛行場脇に建つ「浪分（なみわけ）神社」

→元々、南東方向の八瀬川付近に建立された稻荷社（堂）であったが、「慶長の三陸沖地震」〔慶長16年（1611）10月28日、震央東経144.0度、北緯39.0度、マグニチュード8.1〕に於いて、霞目地域に迄、津波が襲来し、1,700人以上の死者を出したことを受け、元禄16年（1703）8月16日に、又右衛門等を中心として、この津波が二手に分流して引いた場所に小祠を移築し、浪分の神社として津波除けとすると共に、人々に対する教訓としたとされる。「浪分大明神」としての津波除け信仰も、この時に起こったという。子供でも目で見てすぐにわかる、□□的な指標。白馬に跨った海神が大津波を南北に分断して鎮めたとする伝承をもまとわせながら、後世の人々に対する震災時の教訓としたものである。江戸時代以前の日本では、□□率（文字認知率）が低いために、文字を使った形式での情報伝達は困難であった！

③「浪切不動尊（なみきりふどうそん）」と称する施設（寺院、神社が混在）の存在

→例えば、宮城県塩竈市にある鹽竈神社西方約310メートル余の高台（海岸より約1.4キロメートル地点）にある浪切不動尊。更に、宮城県東松島市沼尻の石巻工業港沿岸部（北上運河と定川、石巻工業港に挟まれた沿岸地域）にも同名の不動尊が存在していたが、こちらの方は東日本大震災により、消失している。宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡14-1「浪切不動堂は榴岡天満宮下の東の急坂を挟んだ向かいの角にある。浪切不動堂の名称の由来は、慶長16年（1611）の慶長三陸津波が、梅田川を駆け上がって来た最終到達点、つまり、「□□の波切り」であったことに由来する。当時の梅田川は、現在の七北田川を横切り、白鳥団地、蒲生竹の内周辺を流れていたとされ、現在の仙台港が梅田川の河口であったらしい。

④□□から災害痕跡を読み取る

→仙台市若林区にある「荒浜」と宮城県亘理町の「荒浜」、石巻市の「荒浜」。調べたところ、日本には宮城県内に3カ所、新潟県内に2カ所の「荒浜」が存在する。亘理町荒浜は当初、「□浜」の表記を以って「あらはま」と訓読させ、即ち、河口部に新規に立てられた浜の語義がその起源であるとする（「安永風土記」による）。その後、音のみを同じくする「荒浜」の語に置き換えられたらしい。その置き換えられた理由や、変更の時期ははっきりとはしないものの、態々、「新」字を「荒」字に置き換えた背景には、『大漢和辞典』の「荒」の項に依る、「荒地」、「飢饉」、「覆う」、「捨てる」、「忘れる」、「荒む」、「溺れる」、「滅びる」、「遠い」、「大きい」、「広い」、「暗い」、「暴風雨」と言った意味用法が、この語より、災害や、それに伴った過去に於ける被災を想起させるものでもあることに、留意する必要もあろう。単な

る偶然の当て字であった可能性もあるが、必ずしも、津波のみに起因するものではないものの、それによる浸水被害の発生を理由としていたことも排除されるものではない。この荒浜地区のすぐ北方には、上述の現仙台市若林区の荒浜が存在していたにも関わらず、態々、発音が同じ「荒」字に置き換えた理由の追究が必要とされる。

⑤□□と古墳

→名取市内には多くの古墳が築造されていた。それらは、毘沙門堂古墳（円墳・□□後円墳、5世紀中頃）、雷神塚古墳（円墳、古墳時代中期～後期）、雷神山古墳（前方後円墳、4世紀末～5世紀初頭）、飯野坂古墳群（前方後方墳5基・方墳2基、4世紀後半～5世紀前半）、名取大塚山古墳（前方後円墳、5世紀後半期）等であり、雷神山古墳、飯野坂古墳群、及び、名取大塚山古墳は、JR東北本線の西側に位置していることより、4世紀末～5世紀後半にかけての時期には、現在のJR東北本線付近が当時の□□浸水線を示し、雷神塚古墳（高さ約5メートル）や毘沙門堂古墳（高さ約8メートル）は、浜堤上に築造された古墳であって、県道10号線の直ぐ西側に所在しており、そこが5～6世紀当時に於ける津波浸水線を示していた可能性がある。両古墳の持つ約5～8メートルと言う高さには、5～6世紀当時に於ける津波襲来を意識した人々に依る重要なメッセージが込められていた可能性もあったものと推測をする。尚、両古墳の周辺には、更に、塚根の塚古墳（円墳）、経ノ塚古墳（高さ約7メートルの円墳）等も存在していたが、開発工事等の要因により、現在ではほぼ消滅。

⑥石巻市の日和山（ひよりやま）と濡仏（ぬれぶつ）伝承

→宮城県石巻市にある日和山（好日山、こうじつさん）は、現在では同市日和が丘二丁目地内に所在する、日和山公園一帯を指す名称である。その標高は約56.4メートル程で、洪積段丘の孤立丘であって、元々あった自然地形（丘）を利用したものである。その頂上部分には、宝亀11年（780）12月に、陸奥鎮守府副将軍であった百濟王俊哲の奏上により、創建されたとする鹿嶋御兒神社（日和山神社）を祀っている。「増訂 石巻案内」所収の「石巻市街圖」では、日和山の直ぐ太平洋側には、「称方寺」、「ハマヨコ丁」を挟んで、「濡仏」として、仏像が記載されており、その先は「雲雀野」と言う原野となっている。現在、南浜地区と称されている場所に該当する。又、その下方（西側）に当たる日和山の山麓には、既に、門脇小学校の記載もある。雲雀山濡仏堂の石碑文「尊像の縁起」に依ると、この濡仏は、元禄9年（1696）11月1日に、当地方へ襲来した津波に依る犠牲者の霊を供養する目的で、□□氏らが建立を発願し、京都の仏師に鑄造を依頼して、設置したものであるとしている。この津波では当地で多数の溺死者と、300隻の船舶被害を出したという。この仏像は京都から石巻への船に依る海上輸送の途上、千葉県銚子沖で輸送に当たっていた大日丸が遭難し海底に没したが、文化15年（1818）4月8日（□□まつり、灌仏会の日）に、石巻の雲雀野海岸において漂着していたのが住民により発見された。この仏像は、長年に渡って海中に沈んでいた為に、海水を浴びた如き容姿であったことより、「濡仏」と称される様になった。現在、この濡仏は東日本大震災に伴う津波により流出して台座のみが残り、その所在は再度不明となっている。この逸話の信憑性は不明だが、日和山南麓より旧北上川河口にかけての場所が、地震発生時には津波襲来や浸水の危険性が高い場所であると言う認識の下に設置された、可視的な教育効果を狙った構造物、それが濡仏であったのであろう。